

～ 令和2年度都立高校入試を振り返る ～

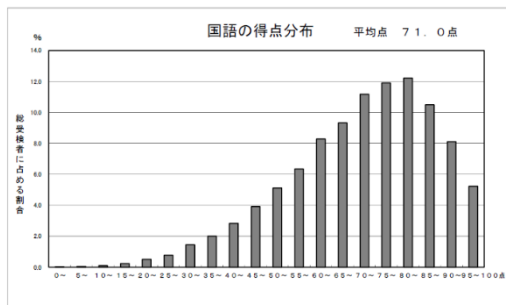
6月下旬に、東京都教育委員会から『令和2年度都立高校入試に関する調査報告』が発表されました。下表は教科別平均点です。平均点が増加した科目としては、国語で+10.1点、英語で+0.3点、社会で+4.3点でした。逆に減少した科目では、数学で-1.2点、理科で-13.7点でした。国語と理科の変動が特に大きいことがわかりますが、その要因は何だったのでしょうか。今回は得点分布の変化から分析してみます。

教科別平均点

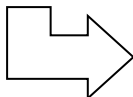
教科	国語	数学	英語	社会	理科
R2年度	81.1点	61.1点	54.7点	57.0点	53.4点
H31年度	71.0点	62.3点	54.4点	52.7点	67.1点

【国語】

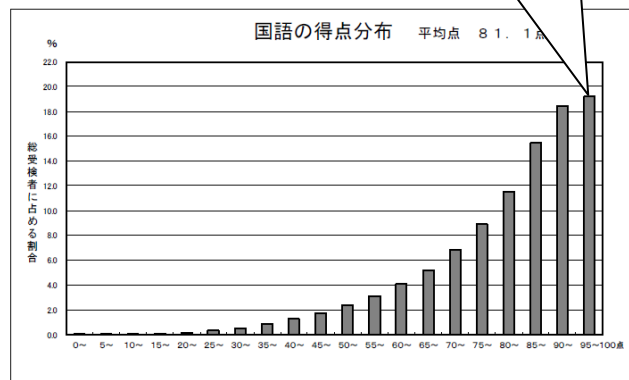
得点分布の変化



平成31年度入試



New!



令和2年度入試

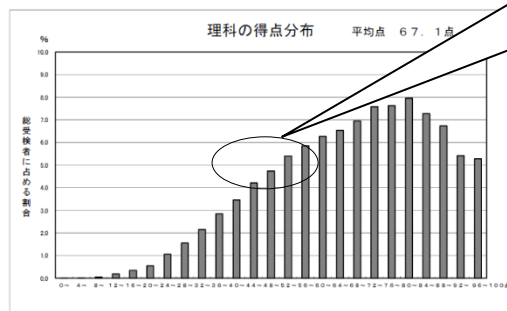
おそらく問題を作成した先生もびっくりしたであろう高い平均点です。手元の資料に過去17年間分の国語の平均点の推移があるのですが、その中でもっとも高かった平成28年度入試の73.9点を大きく上回りました。さらに、上記右の得点分布表。なんと全体の約19%（5人に1人）が95点以上を取っています。

設問ごとに分析をしてみましょう。まず、選択問題では、「これしか選ばないであろう問題」が多かったのが特徴です。大問3の文学的文章の人物像や心情変化も読み取りやすいものですし、大問4の説明的文章も、一読すると難しい題材のように見えますが、問題では直球的で、表面的な理解でも十分解答できる問題であったと言えます。そして何より、傍線部の直前や直後さえ読めば、正解を探し出すことができる問題が多かったのも一因でしょう。また、苦

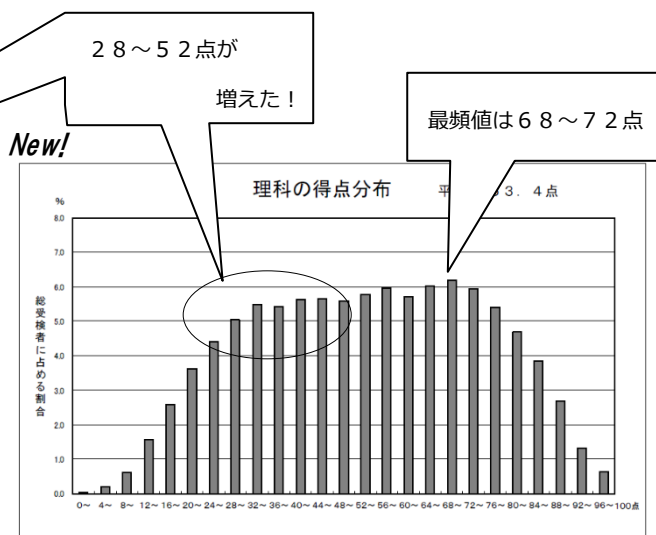
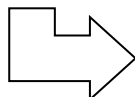
手とする人も多い200字作文ですが、テーマとしての難易度は例年並みかと思いますが、これも例（サッカーの監督の話）が本文に示されていたため、内容に課される「具体的な体験・見聞」が思いつきやすかったのではないかと想像できます。

【理科】

得点分布の変化



平成31年度入試



令和2年度入試

逆に平均点が一気に下がったのが、理科です。－13.7点。ただし、平成29年度入試より3年連続で上がり続けたための「得点調整」のニュアンスは感じられます。

しかし、それ以上に特徴的な点が2つ見受けられました。まず、都教委からも指摘があった「仕事」「光の反射」「電流」「発熱」「天体」「溶解度」の誤答の多さについて。普段指導する立場からみると、これらは「理科が苦手」の受験生が間違いやすい典型的な单元であるという点です。計算が必要であったり、現象の本質的理解が不十分だと正解にたどり着かないからというのが理由とも言えるでしょう。これは、上の分布でも28～52点までの層が一気に増えたことから想像ができます（約18%→約33%）。そして今回の最頻値は68～72点であるということ。これは、理科が得意、あるいは苦手としない受験生は、まずまず得点できたということを示します。これらのことから、できた生徒とできなかった生徒の差がよく表れた結果とみることができますね。

【まとめ】

8月号でもお知らせした通り、来年度の都立入試は学校の休校が長引いた影響により出題範囲が縮小されます。しかし、上位校を中心にして、入試の内容が簡単になるかという話は別です。また、全体的にもこの数年の平均点は上昇傾向にあります。よって、むしろ今回平均点が高かった国語を中心に、出題範囲を制限しつつも、本質的内容を理解しているか問われるような、少し難しい内容になる可能性があると思っています。受験生のみなさん、どうか気に留めておいてください。

コロナ禍の大変な状況ですが、周囲の声に惑わされず、できることをコツコツ積み上げていくことが志望校合格の大きなカギになると思います。ベストのスタッフも、このようなときだからこそ、みなさんのお役に立つよう全力で指導にあたっていく所存です。